

# 越前武生の打刃物の隆盛と衰退

箱 田 昌 平

キーワード：株仲間，伝統的工芸品，刃物産地，越前鎌，播州鎌，利器材

## はじめに

越前武生の打刃物産地の興亡について検討する。この産地の歴史は古く、伝統的な方法で鎌や包丁が作られている。越前武生は江戸時代の中頃から明治の初期まで、打刃物の最大の産地であった。なぜ、最大の産地になれたのか、また、なぜ、急速に衰退の道を歩んだのかを明らかにしたい。明治初めから現在までの越前武生の動向も検討する。また、産地で取られた活性化策について検討する。今回は、鎌が中心になるので、包丁については十分に触れていない。このため、現在の越前武生の包丁の動向については検討していない。さて、打刃物とは鍛造作業によって作られる刃物で、全鋼製の板を打ち抜いて作られ、鍛造作業の伴わない刃物とは別のものである。越前武生では伝統的な打刃物にこだわる産地である。

## 1 越前武生の刃物産地の形成

越前武生は新潟三条等、岐阜関、大阪堺、高知土佐山田等、兵庫三木・小野と並ぶ6大刃物産地の1つである。1332年頃著名な刀鍛冶千代鶴国安が立ち寄った。鍛冶に適した水があったので、彼が当地に定住したことから刃物産地となったといわれている。このように、越前武生は歴史の古

い刃物産地である。国安は当地で刀を製作する傍ら鎌を作り、その鎌が非常に優れていた。そこで、これが当地に定着して作られて越前鎌の起源となったのである。

越前武生は古くから府中と呼ばれ、越中、越後に抜ける北陸道の要所である。京都から滋賀をへて山間部を越えると、北陸に開かれた平野の入り口に当たる。越前武生は中央に日野川が流れ、これが北流して九頭龍川となり福井の中心街に通じている。当地は越前の国府が置かれる政治の中心地でもある。国府には細工所が置かれ鍛冶が存在したと思われる。南北朝時代には越前守護所が置かれ、武器や刃物が製造されたはずである。その時代に千代鶴国安の来訪があったのである。

越前武生は今日打刃物の産地の1つであるが、産地を形成させたのはこの鎌である。その後わずかに他の刃物が作られたが、包丁と鎌を中心とする産地である。例えば、新潟三条等や兵庫の三木は金物産地といわれ、刃物を含めた多数の金属製品を産出している。当時は越前武生は現在の福井よりも政治・経済の中心であり、平野を控えて農業の盛んな土地で、武器をつくる刀鍛冶や農具をつくる野鍛冶が存在した。しかし、打刃物特に鎌の産地として形成されたプロセスについて詳細な資料は存在しない。付記した年表に明らかなように、1538年には専門の打刃物業者が現れて、鎌を製造したという記録はある。こうした鎌が江戸時代の初期（1620年頃）から漆掻職人の行商によって全国に普及し始めた。

越前は漆掻職人の多い地方である。1617年日光東照宮が造営されたとき、越前に漆液の納入と採集が命じられた。越前はそのころから漆の本場であり、漆掻職人は当時の今立郡に多い。当地は奥深い谷であり稲作に適していない。1730年頃から、樹液の採取される6月から10月までは、伊賀、中部、関東、東北地方に人口の半分が出稼ぎに出かけていた。漆掻きの道具だけでなく、山鎌や木鎌の越前鎌を携えていた。この鎌が鋭利で長切れするので有名になった。やがて、漆掻き的一方で、越前鎌の行商がお

こなわれるようになった。1660年ごろからすでに鎌は越前武生の名産品となっており、この鎌の東北地方への販路が開かれたのである。

鎌を産地別に分類すると、津軽鎌、岩手鎌から鹿児島への加世田鎌、垂水鎌まで48の鎌と、それ以外の地鎌まで多くの鎌が存在する。地鎌はそれぞれの地の野鍛冶が作ったもので、無数の鎌が存在する。1950年代の都道府県（沖縄除く）の鎌の自給状態によって、これを4つの地域に区分できる。鎌を外部に供給しているのは13都道府県である。地域で自給されている都道府県は2つある。過半数を供給するが残りを外部に依存する都道府県は3つである。他の26の都道府県はほとんどを移入している<sup>1)</sup>。

前述のように、1660年頃から越前武生の鎌が名産品となって、他地域に移入されるとその地の野鍛冶は農機具の修理だけの仕事となる。これは越前武生に鎌の産地が形成される嚆矢である。越前鎌の漆掻職人による普及は山間地からで、やがて平野部に及ぶと他の産地の鎌や野鍛冶の鎌と競合することになる。

年表のように、1746年頃には越前武生には鎌、包丁、釘の鍛冶仲間が形成されている。この仲間組織は中世の座と類似している。仲間数、株数を制限して、自由な営業を禁止している。また、これは徒弟制度と一体となっており、株を保有する親方のもと弟子達は修行し、一定の年限の後職人となるが、株を取得できなければ自営することはできない。株の譲渡は厳しく審査される。こうした中間組織によって打刃物の品質が守られるだけでなく、株の制限によって乱売が防止され価格の安定が図られる。ドイツのマイスター制度と類似した組織である。株仲間の形成は産地の形成の証拠でもある。

---

1) 農林省 [8], p.2.

## 2 越前武生における産地の隆盛

漆掻職人の行商によって鎌の販売は拡大したが、鎌行商人のうち一部は専門の間屋になるものもいた。産地に卸問屋が生まれると、問屋は販路を拡大するためそれぞれの地域に適合した鎌の製造を鎌鍛冶に命じるようになる。この問屋が進出した地域では野鍛冶が存在できなくなる。こうして産地では多品種の鎌が作られるようになり、それぞれの鎌を生かした優秀な製品をつくることが可能となり、産地の基盤は一層強固となる。卸問屋が株仲間を作るようになると産地は一層強い競争力を持つようになる。

1850年に越前武生の山内長四郎は伊勢・伊賀を訪れ、伊賀型風切鎌を見つけた。この鎌は越前武生で作られる鎌よりも薄く鋭利でしかも軽く、耐久性に富んでいた。越前武生の鎌は漆掻職人が愛用する山鎌を主体としており、この鎌は越前武生にとって画期的なものであった。彼はこれを越前武生に持ち帰り、工夫した越前伊賀型鎌を作り評判を得た。越前鎌の基本は伊賀地型に由来している。越前鎌の隆盛が訪れるのは山内長四郎によるものである。

1822年に打刃物卸問屋30名は町奉行所に株仲間の許可を申請した。この原因は越前鎌の不良品が全国に出回り、これに代わって越後や三河産の鎌が広がっていたからである。このため、問屋仲間を組織し不良品を厳しく規制して越前鎌の名声を取り戻そうとしたのである。この事件は問屋仲間申請事件と呼ばれている。しかし、鍛冶仲間の反対にあって株仲間の申請は許可されなかった<sup>2)</sup>。卸問屋の数が制限されると、鍛冶仲間が相対的に弱くなるからである。この当時は鍛冶と販売業者の力関係は対等であったと思われる。

---

2) 齊藤 [6], p.144.

1859年に越前武生の卸問屋木屋が上野国（群馬県）の商圏を越後鎌によって侵食されたので、新設された制産所に救済を求めている<sup>3)</sup>。関東の利根川流域は、1800年頃から越後の三条からの卸問屋の商圏となっていた。越後鎌は平野から山間部へ、越前鎌は山間部から平野部へ進出して、商圏が競合することとなったのである<sup>4)</sup>。この頃は三条も鎌の産地が形成される嚆矢であった。このように、越前鎌の商圏が開かれたのは、越前の漆掻職人の行商によるもので、木鎌、山鎌が中心であったので、薄刃の草刈鎌はなかった。越後や三河鎌は平野部から普及するので、草刈や稲刈鎌が主流であった。商圏が競合するにつれて、越前でも草刈鎌や稲刈鎌が作られるようになる。

関が原の合戦によって江戸時代が始まると、福井は北陸路の入り口であるので、家康の次男結城秀康を藩主とした。福井藩の家老本多富安は府中（武生）を与えられた。本多家は幕末まで、当地を支配して、治水や新田開発及び殖産興業に力を入れた。鍛冶は集団で町の南部に集められた。現在でもわずかに10に満たない事業者が、同地に留まっている。越前武生で鎌が名産品とされるのは藩の保護の結果でもある。福井藩では福井に物産総会所を設け、越前武生には制産役所を置いた。制産役所は鍛冶仲間や卸問屋仲間を支配した。越前鎌が全国に販路を広げられるのは、制産所の施策のせいでもある。制産所の意図は藩の財政の立て直しのためである。これは卸問屋を保護するもので、積極的に鍛冶を支援しようというものではない。こうした施策が卸問屋の優位性を強め、問屋が事業者である鍛冶屋を支配下に置くことに結びついている。このように、江戸時代の中期から明治の初期まで越前武生は打刃物の最大の産地であった。

図表1によって、1874（明治7）年の「府県物産表」で、越前武生の打刃物のシェアを見ると、鎌では全国の27.4%を占め、全国1位である。2

---

3) 齊藤 [6], p.144.

4) 朝岡 [1], p.234.

## 越前武生の打刃物の隆盛と衰退

図表1 府県別の打刃物の生産量（1874年）

鎌	県	敦賀	新潟	飾磨
	生産量	970,763	256,100	35,199
	シェア	27.4	7.2	1.0
包丁	県	堺	敦賀	飾磨
	生産量	502,900	309,659	4,481
	シェア	41.6	25.6	0.3

資料：(斎藤 [6], PP.236~238.) より作成。

位の新潟の3.7倍の鎌を生産している。播州鎌の産地である飾磨は25位で、越前武生はこの地の433.5倍の鎌を生産している。包丁では越前武生は堺について全国2位で、全国の25.6%を占めている。飾磨は19位で越前武生の生産量の1.4%にしかない。鉈では4位で、鋏では2位である。このように越前武生はこの時代の打刃物の最大の産地であった。しかし、1878年には新興産地の台頭によって販路を侵略されるようになる。

### 3 播州鎌の隆盛

江戸時代中頃から明治の初期まで、越前武生の打刃物の産地は全盛期であった。この産地の打刃物の中心は鎌と包丁である。しかし、1878（明治10）年から新興産地によって、越前鎌の商圏は侵食されるようになる。この原因は越前鎌の名声を利用した粗悪品の乱売である。明治維新によって鍛冶屋仲間や問屋仲間が廃止されて参入自由となり、製造業者や販売業者が増加したことが乱売の原因であった。越前武生ではこれを阻止するため、協同組合を組織して統制を強化しようとしたが結果は強くなかった。卸問屋7名が県外移出の粗悪品を買い取るため、1885（明治17）年武生打刃物改良会社を設立し、粗悪品を買い取り武生の信用を回復しようとし

た。やがて、製造業者 77 名も打刃物改良製造社を作った<sup>5)</sup>。

明治時代に入って、1887（明治 19）年廢刀令が出されたため、各地で刀匠は日本刀の技術を利用して打刃物を作るようになった。このため、各地に鎌の名品が生まれ、越前鎌の販路が侵食されるようになった。この時代播州鎌は揺籃期であった。播州鎌の始原は「伊助鎌」といわれている。この鎌を作った刀匠藤原伊助はこの地の一柳藩の抱え刀匠であった。明治維新によって扶持をもらえなくなり、剃刀鍛冶に師事した。その後剃刀の製造法を活用した鎌を製造するようになった。この鎌の切れ味が優れていたので、剃刀鎌とも呼ばれるようになった<sup>6)</sup>。

江戸時代の初期から伊賀の国名張と上野は物資の集積地であったが、越前行商人によって当地は越前鎌によって独占されていた。伊賀の西側甲賀の青木福松は越前鎌を仕入れ伊賀で販売していたが、当地で偶然切れ味の良い剃刀鎌を見つけた。この切れ味を越前伊賀型に採用すれば成功すると考えて播州鎌を改良した。その後、伊賀では 3 年間越前鎌と改良型播州鎌が販路を奪い合った。その後、伊賀の国は播州鎌が支配するようになった。この播州鎌は東海道、山陽線の鉄道の開通によって販路を拡大していった。また、原料として、洋鉄・鋼を鎌に利用するような製造方法がいち早く当地で開発・普及した。1919 年に設立された山陽利器では鉄と鋼を鍛接した利器材を使用して鎌が作られるようになり、播州鎌が越前鎌を席捲するようになった。

#### 4 原料の変化と技術革新 ～和鉄から洋鉄へ～

日露戦争前後から輸入鉄が打刃物に本格的に使用されるようになった。それ以前は和鉄、和鋼が中心であり、武生では出雲伯耆産のそれが使用さ

---

5) 齊藤 [6], p.239.

6) 大農林会 [3], p.100.

れた。これらは安来から北前船によって福井の河野湊ないし三国湊から武生に運ばれた。海路で比較的容易に原料が入手できて、その海路を通じて打刃物製品が運ばれることも武生が、産地として発達する原因でもある。越前武生で生産された打刃物は陸路で行商人によって運ばれるものが大半であった。しかし、和鉄・和鋼の生産量は一度に大量生産できないので、高価である。これらを原料にする打刃物の製品も一度に大量生産できず高価でもある。したがって、良い長切れのする製品を丹念に作って、何度も研いで長時間使用することが必要である。

これに比べて洋鉄・洋鋼は大量生産ができた。しかも、品質が一定の原料で安価であった。1880（明治12）年頃和鉄は輸入鉄の4倍から8倍の値であった<sup>7)</sup>。日本でも1903（明治36）年には八幡製鉄が操業して、踏鞴製法によらない鉄鋼が生産されるようになった。

1880（明治12）年頃には輸入された洋鉄・洋鋼を少量ながら使用する業者も生じた。これらを原料とする打刃物は安価であったが、製造技術が確立されていないため不良品が生産された。武生では1893（明治26）年ごろ製造業者と販売業者が「契約交換証書」を交換して洋鋼の使用を禁止している。このような洋鉄・洋鋼の使用禁止はほぼ同時に各産地にも実施されている。なお、砂鉄による和鉄の生産量を国内産の鉄鋼が上回るようになったのは1894（明治30）年の頃である。

三木では1884（明治16）年の松方財政の緊急政策と、洋鋼使用によって価格破壊が生じ、業者が半減したといわれているが、明治政府は「同業組合準則」を發布し新しい時代に応じた組合を作り、粗製造を取り締まらせるような施策を実施した。このため、三木では1890（明治22）年頃には元の状態に回復している。三木でも1880（明治12）年頃から洋鉄が使用されるようになった。三木の鋸鍛冶井筒信吉は洋鋼にあった鋸の製造方

---

7) 斉藤 [6], p.233.



法を確立したからである<sup>8)</sup>。1895（明治27）年には井筒新吉は三木の平均の職工業5.2人の14倍になる73人の職人を使用する鍛冶工場を経営している<sup>9)</sup>。なお、新潟三条の鋸に洋鋼が使用されるようになったのは1887（明治19）年である。新技術の普及は急速であるが、井筒新吉のこの技術革新は画期的なものであった。

武生では、1897（明治29）年から和鋼から洋鋼への転換がみられるようになった。三条への新技術の普及よりも約10年遅れていることになる。三木では鋸以外の打刃物に洋鉄・鋼を使用する技術の普及が他産地よりも早くおこったであろう。播州鎌の量産化が活発になったのは1926（大正9）年である。これには洋鉄・鋼が使用されている。また、前述のように三木では1919（大正8）年に山陽利器が設立されており、鉄と鋼を鍛接する必要がなくなり、量産化への道が開かれたのである。

## 5 明治・大正における越前武生の打刃物の動向

1875（明治7）年、打刃物の産地として隆盛をみることができるが、明治維新後の新しい変化に適合できなくなり、越前武生の産地は衰退の道をたどることになる。まず資料でその衰退を明らかにしてみよう。詳細な資料はないので継ぎ足しながら検討してみる。

図表2から明治初期の越前武生の打刃物の生産額を見ると、1877（明治10）年から生産量と生産額が衰退していることが明らかである。1873（明治7）年の府県別の生産量で越前武生の打刃物産地の隆盛ぶりをみたが、すでにこの頃は産地の衰退が始まっていたと考えられる。

次に図表3によって明治中期の福井県の打刃物推移を検討してみよう。福井県の打刃物の85%以上は越前武生のもので、この資料によって越前

---

8) 桑田 [5], p.21.

9) 桑田 [4], p.109.

## 越前武生の打刃物の隆盛と衰退

図表 2 越前武生の打刃物  
(生産量：個，生産額：円)

年	生産量	生産額
1867	4,000	—
1877	2,800	35,000
1885	2,000	25,000

資料：(西井 [7], P.56.) より作成。

武生の動向は明らかとされる。明治維新から 1894 年の 25 年間では生産額は一進一退となっている。1890 年代の後半からは、明治の初期の生産額の 3 倍となっている。この頃になって越前武生にも洋鋼による打刃物の生産が定着したためであろう。粗悪品も多かったであろう。

しかし、生産額以上に販売額は顕著な発展を続けている。その実状は明らかでないが、地元生産額 50～60 万円に対して、全体の販売額は 200 万円を超えている。他県からの委託販売が地元の 5～6 倍あるということである<sup>10)</sup>。卸問屋は他の産地の打刃物を移入して、越前の自らのブランドで販売しているということである。

図表 4 によって 1890 (明治 33) 年の打刃物の内訳をみると、打刃物のうち鎌のシェアは約 40% となっている。しかし、1891 (明治 34) 年にはそれは約 30% へと減少して、鎌から包丁へと移行していることが明らかとなる。

明治の後半になると、越前武生では打刃物の技術向上のために、表彰制度を設けている。これによると 1899 (明治 34) 年の福井県重要物産共進会で、山内庄右衛門が卸業功労者として表彰されている。これは料理包丁製

図表 3 明治中期の福井県の打刃物の生産額 (生産額：円)

年	生産額
1888	65,000
1889	65,000
1890	65,000
1891	75,000
1892	88,000
1893	104,000
1894	38,000
1895	152,000
1896	171,000
1897	190,000
1898	190,000
1899	216,000
1900	174,000

資料：(西井 [7], P.56.) より作成。

10) 斉藤 [6], p.58.

越前武生の打刃物の隆盛と衰退

図表4 越前・武生の打刃物生産額（円）

品目 \ 年	1890年 (明33)	1891年 (明34)
大鎌	29,825	14,000
小鎌	24,915	16,250
桑切包丁	—	3,210
打刃物生産額	136,850	95,850

資料（西井 [7], p.56.）より作製。

作の功勞を認められたものである。山内家は刀をルーツとする代々の旧家であり、「鎌庄右衛門」として著名であったが、この頃鎌から包丁への轉換をはかったのである。また、庄右衛門は富岡鉄斎との交流でも知られている文化人でもあった。また、同共進会では小泉仁太夫も桑切包丁その他の利器で1等賞を獲得している。こうした人物によって再興への試みもなされている。以上のように1890年代に鎌から包丁への轉換の道が開かれている。

産地衰退への危機意識は業界全体に共有されており、再興への施策が数多くとられる。この最初の試みは同業組合の結成である。1900（明治33）年「重要物産同業組合法」が公布され、同業組合が認可されることになった。越前武生でも卸問屋と鍛冶業者による越前打刃物同業組合が1910（明治43）年に発足した。

この背景には越前打刃物の販路が播州、信州、越後の製品によって浸食されているという危機感があるのである。同業組合の草案には製品の検査、試験場、徒弟養成所、製品陳列所の設置が盛り込まれている。これが具体化したのは、1913（大正2）年に製造試験場と徒弟養成所ができたことである。ここには播州、堺から優秀な職人を招いて、剃刀、鋏、鋸、鉋のみ、小刀および包丁の製造方法を学習させた。播州からの職人が多かったので播州工場と呼ばれている。この職人の中には越前武生に定住する者もいた。現在その中には伝統工芸士として認定されているものもいる。こ

うした施策は卸問屋のもとになされている。しかし、1944年大戦への動きの中で、県からの補助金が打切られたので解散された。

この同業組合の試験場の目的は生産の効率化・機械化である。機械化の中心はベルトハンマーと回転砥石である。ベルトハンマーは鍛造の効率化と作業の負担の軽減によって、打刃物の量産化に貢献する。鍛冶仕事に典型的に見られるように、鍛接や引き伸ばしは2人による大槌の作業で重労働であった。ベルトハンマーの導入で1人の作業となり、刃物の量産化を大幅に進めた。この試験場には3台のベルトハンマーが購入されたが、2台は金沢の中村鉄工所から購入したものである。日本でのベルトハンマーの最初の開発は金沢の中村吉治によってなされた。吉治は1924（大正13）年武生の業者の要望を取り入れ試験機を完成させた。この試験場には中村鉄工所から技師を招いて技術指導がなされた。やがて、この試験場からもベルトハンマーが製造された。また、民間からも福田鉄工所のようにベルトハンマーを作る会社が現れた。武生はベルトハンマーの進んだ産地となり、1929年には全国に販売されるようになった。

## 6 武生における卸問屋支配の確立

製造業者は非常に零細な個人経営の家内工業で、仕事場と住居が一体となっている。これらの業者は卸問屋の下請で仕事を受注していた。戦後の決済方法は月末または翌月始になされることが多かった。製造業の設備投資に対して、卸問屋は信用機能も持っており、製造業者の隷属性は強かった。卸問屋は打刃物を製造業者から入手すると、次に刃付け業者に回して研磨した後に、商標や刻印して店先で柄を取り付けしていた。刃付け業者の隷属性は一層強く、製造業者への支払いが手渡しされていたが、刃付け業者には現金を投げ渡していたとされる。製造工場を直接経営している卸問屋もあった。打刃物のよく売れる時代には製造業者も刃付け業者も卸問

屋に従属して、卸問屋の指示通り刃物を製造するだけでよく、生活の保証もされた。製造業者は、職人として伝統的な方法で製造することに専念し、どんな製品を作るかも考えたことはなかった。しかし、製造業者はこのように資金が少なく弱い立場であったが、組合を組織して団体で値上げ交渉をすることも見られた。しかし、製造業者が零細であるため、大量の受注が出来ないので、武生の卸問屋は他産地の打刃物を仕入れ、武生製品として商標等をつけて販売するようになった。

製造業者である鍛冶と販売業者である卸問屋の相対的な強さの関係について検討する。鍛冶が株仲間を形成したのは、1742年頃のことであるが、卸問屋の株仲間が形成されたのは、1764年から1781年（明和・安永）の頃であるから<sup>11)</sup>、このように1770年代までは鍛冶である製造業者の方が強かったと考えられる。その後卸問屋が台頭すると、打刃物の値段の決定権が卸問屋に移行してきた。卸問屋支配の強化に伴って、鍛冶仲間も対抗して仲間総休を強行した<sup>12)</sup>。

1806（文化3）年から1822（文政5）年の問屋株申請事件まで、数回の総休みが行われている<sup>11)</sup>。越前武生の製造業者は、他産地のように農業の兼業で鍛冶をするのではなく、ほとんど専業で打刃物を製造しているので、卸問屋仲間との対立は激しいものになる。この間はまだ両者の力関係は対等であった。しかし、卸問屋の販売ルートが全国に広がると、越前武生の打刃物の生産量では賄いきれなくなり、他産地から買い入れた製品を武生のブランドで販売するようになると問屋支配が強くなる。とくに越前武生の鍛冶は零細であり、古くからの伝統にこだわった製造方法によったため、量産することは出来なかった。また、越前武生の生産品目は包丁や鎌に限定されており、卸問屋は商圏を全国に広げるにしたがって、同産地の取引のウエイトが小さくなり、卸問屋主導性が強まっていった。

---

11) 斉藤 [6], p.131.

12) 斉藤 [6], p.114.

こうした相対的力関係の変化によって、鍛冶業者は卸問屋への隷属性を強め、問屋の指示通りの品物を注文だけ作るという状況になった。これに対して卸問屋の方は、全国の卸問屋と競合する中で、総合的な企画力を持たなければ存続が出来なくなったのである。

## 7 日本のものづくりと鎌および包丁の文化

戦後日本では物質的に豊かなアメリカ的生活スタイルを尊重する一方で、日本の伝統や文化を軽視する傾向が長く続いている。そのような中で伝統的な工芸品を使わなくなり、それに関する知識も失ってきた。また、逆に海外では日本の伝統文化を注目するようになってきているが、伝統工芸品を作る技能が一度失われると、これを再生するには時間と費用が必要である。失われた伝統工芸品を再生する費用よりも、これらを細々とでも生かして、伝統を守ることが必要である。

鎌や包丁は農具と生活用品であり、伝統工芸品とは言えない。しかし、それらの品は製造方法の工夫等において日本独特の発展を続けており、まさに伝統的工芸品として尊重されて、伝統を存続される価値のあるものである。

鎌は鍬や鋤と並んで農作業に欠かせない農具である。これらの農具の改良や量産は農業の発展に欠かせないものである。利用形態からみて生産量の多いのは鎌である。それぞれの国でこれらは独自の発達をみせている。日本ではいずれも大陸文化の影響を受けているが、鉄の生産が砂鉄による日本古来の踏鞴鉄・鋼のために生産には制限がある。このため、高価であるので何度も使用されるべく地鉄と鋼を鍛接して鍛造する独特の発展を見せている。また、日本刀の作り方すなわち日本刀の鍛造技術が、鎌や包丁に大きな影響を与えている。とくに日本刀が次第に使用されなくなる中で、刀匠は鎌や包丁に転職した者も多いたはずである。また、包丁は生

活用品であるが、日本の食文化と深い関連がある。

日本の食文化は素材の味をそのまま賞味しようというもので、このために素材に応じた包丁が発達してきた。日本の包丁は野菜や魚、鳥、鰻及び肉等をそれぞれ切るため特別な機能を持って作られている。このため、包丁の種類も非常に多い。西洋の包丁と日本の包丁の違いは子供の三輪車と段変速機付き自転車ほどの違いがあると言われている。これに対して西洋包丁は抜刃物といわれ、鋼を含んだ鉄板をプレスで打ち抜いて、刃付けをして制作される。したがって全鋼製の包丁とも呼ばれている。典型的な少品種大量生産で、安価で販売することができる。

しかし、日本の伝統や文化を軽視する生活スタイルの流行によって、日本人の食生活も変化して日本の伝統的な包丁は次第に使用されなくなり、安価な西洋包丁も輸入されるようになった。日本の包丁はそれぞれの用途に応じた切れの機能を確保するため、その機能に応じた鋼が地鉄と接合されて作られているからである。鋼の選択から、その鋼に応じた柔軟さと強さを調整するための鍛接の技能が要求される。こうして発達した鍛造の技術は現在でも素形材の加工にいかされている。

## 8 戦後の鎌と包丁の動向

戦後の鎌と包丁の動向を検討してみよう。資料が3人と4人及び全体の事業所調査であるため、継続して詳細な検証は困難である。1970年代から鎌の衰退の傾向がみられる。この頃から農具の機械化がコンバインや田植え機に進展している。1955年から65年にかけて、農村の風景が大きく変わっている。それまでは農業の機械化といえば、脱穀であったが、耕運機が登場し普及し始めたのである。このため、牛や馬の飼育が不用になり草刈りが不要となった。また、1960年代には次第に刈り払機が普及し、農業や営林作業を大きく変化させた。このため、鎌の需要が減少すること

越前武生の打刃物の隆盛と衰退

図表5 戦後の鎌と包丁の推移（出荷額、100万円）

		1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
鎌	事業所				1,150							
	出荷	104	167	247	939							
農器具	事業所				2,669	1,604	1,449	286	254	221	208	179
	出荷				4,446	4,828	9,958	9,802	11,045	10,649	11,738	10,697
包丁	事業所				429	392	451	151	159	160	137	138
	出荷	74	169	625	1,430	4,246	6,458	10,661	22,014	17,314	15,951	14,844

資料：工業統計表，1965年より鎌，鋏，鋤を統合して農機具となる。

になる。

全数で1965年から1970年にかけて、図表5のように鎌鍛冶が1,220減少しており、4人以上の事業所でも1980年の286から2000年の179へと37%減少している。1975年と1980年を比較すると75年は全数で事業所数は1,449あるが、80年の4人以上では286となっている。75年と80年の出荷額の差はない。したがって、鎌鍛冶の大半の事業所は零細な家内工業であり出荷額は非常に少なく、4人以上の事業所の量産化が進んでいるのである。

70年から75年にかけて全数の事業所数は、農作業の機械化をうけて、155減少しているが、出荷額は倍増している。これは産地の中に鎌を量産する工場が多く生まれたためである。なお、1965年以前は鎌，鋏，鋤は区分されていたが、65年以後は合併して農業用器具となっているので、これを鎌の動向として検討した。

図表5のように、包丁の出荷額は1950年から60年まで8.4倍に増加している。1968年から80年まで同様に7.4倍増加し、全体に出荷額は順調に拡大している。戦前の包丁は手作りの鍛造品が多く、高価であった。しかし、日本包丁でも西洋の包丁と同じように全鋼製のステンレス包丁を量産できるようになり、低価格になったため、市場規模が拡大した。高級な和包丁は研磨することによって切れ味を永続することができる。こうした



包丁を長期に管理しながら切れ味を持続させるには、かなりのきめ細かい手入れが必要である。

全鋼製のステンレス包丁は、鋼を含んだステンレスの板をプレスで打抜いて、刃付けしてできる。こうした包丁はデザイナーの設計によってつくられることもあり、デザイン性では優れている。しかし、最初の切れ味は和包丁と同じでも、消耗によって切れ味が低下するスピードは早い。研いで元の切れ味を復元することが困難であれば、買い替えることになる。

例えば、一万円の和包丁を10年間使用するとする。これに対して、打抜のステンレス包丁を二千円で購入して、二年間各に5回買い換えたとする。経済的に両者が無差別だとすれば、どちらを選択するかのポイントは、手間がかかっても切れ味を大事にするのか、少し切れ味は犠牲にして、デザインやモダン性を選ぶかである。

1985年以降は包丁の国内出荷額は約30%減少している。さらに、事業所数もほぼ同様に減少している。輸入される包丁によって、国内出荷額が減少している部分もある。日本人の食生活が大きく変化して、外食で充足するのか、料理を伴ない食材を求めているのか判明しない。日本人の食生活が大きく変化して、包丁へのこだわりがなくなったのだろう。

## 9 越前武生の製造業の推移

福井県は繊維の県と呼ばれており、越前武生に大小のメリヤスを製造する企業がみられる。図表6をみると1960年の越前武生の工業では最大の産業は出荷額59.6%を占める化学工業である。これは1955年信越化学が進出してきたためである。繊維は2位で17%を占めている。また、打刃物の含まれる金属製品は1億4千万円で、1.3%と、縮小し、江戸時代から明治初期の姿は見られない。80年の最大の産業は365億の出荷額の繊維産業で、22.5%を占めている。2番目は電気機械であり、出荷額364億

越前武生の打刃物の隆盛と衰退

図表6 武生・越前市の製造業（出荷額 千万円）

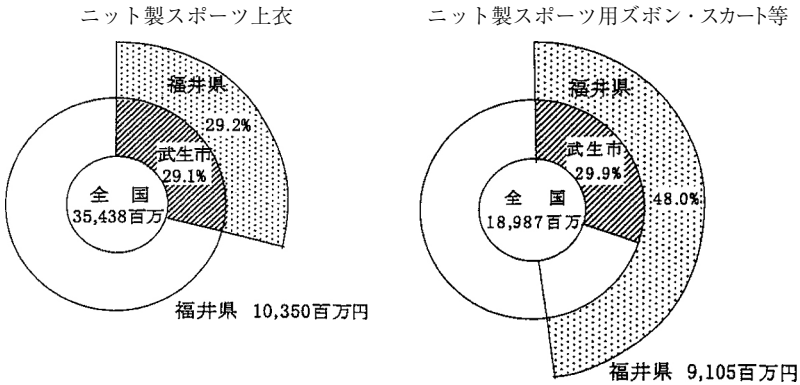
業種 \ 年	1960年	1980年	1990年	2000年
食料品	33	1,293	1,194	682
飲料・煙草			x	x
繊維	184	3,658	683	488
衣料	18	370	2,382	2,098
木材・木製品	39	685	397	262
家具・装備品	9	243	100	113
パルプ・紙	52	1,008	1,040	418
出版・印刷	3	61	154	135
化学工業	542	1,254	1,116	274
石油製品		x	x	x
プラスチック		104	3,130	1,014
ゴム製品		x	x	x
なめし・皮革		x	x	x
窯業・土石	26	749	2,537	701
鉄鋼	6	110	36	56
非鉄金属	62	1,130	1,436	359
金属製品	14	330	429	288
一般機械	10	540	397	264
電気機械	14	3,364	22,399	5,588
輸送機械			x	x
精密機械	0.3	53	281	200
その他	10	x	157	87
合計	1,029	16,216	43,199	14,108

資料：『武生の工業』（武生統計書）

で22.5%をしめている。1955年以降相次いで、電気機械の工業が進出したためである。金属製品は同市の2.0%の出荷額しか占めていない。2000年の最大の産業は電気機械で、2,239億に拡大して51.8%となっている。越前武生の繊維は1.5%を占めるだけで、もはや繊維の街とはいえない。

## 越前武生の打刃物の隆盛と衰退

図表7 越前武生のスポーツウェア産業



資料：『福井県の工業』，2000年。

図表8 特定工業の推移

品目	延事業所数 (件)			製造品出荷額等 (万円)		
	1999	2000	2001	1999	2000	2001
絹・人絹織物	14	12	12	140,705	133,285	133,713
細幅織物	29	28	24	127,749	122,163	88,205
紙・壁紙	9	8	9	201,707	204,153	184,581
利器工器具・手道具・農器具	57	55	49	73,218	73,569	62,433
眼鏡・眼鏡枠	54	48	45	366,796	289,666	143,986
漆器	8	7	5	25,329	20,480	23,218
合計	171	158	144	935,504	833,316	636,136

資料：『福井県の工業』，特集3，(特3特産工業)

3番目を占めるのは衣服・その他繊維で、238億で、5.5%を占めている。図表7のように、この産業はスポーツ・衣料関係で、全国1位を占めている。スポーツウェアのヒットユニオン及びアシックスが進出したためである。2000年の6桁のスポーツ上着では、全国の出荷額の29.1%を占拠している。ニット製スポーツズボンでは22.9%を占めている。

現在の越前武生を代表する電気や衣服は、企業の移転によるものであり、従来から当地に存在する伝統的な産業ではない。図表8のように、福

## 越前武生の打刃物の隆盛と衰退

井県の特定産業とは伝統的産業である。これは「絹・人絹織物」, 「細幅織物」, 「紙・壁紙」, 「利器・工匠具・手道具・農機具」, 「眼鏡枠」, 「漆器」である。図表 8 のように 1999 年から 2001 年の特定産業の推移を見ると、いずれの工業品も事業所、出荷額において減少している。生活様式の変化によって伝統的産業は衰退していることが明らかである。越前武生では上述の産業のうち「利器・工匠具・手道具・農機具」は福井県の 90% を占めている。他の伝統的産業は 2% ほどである。同市では同産業が含まれる金属製品は 0.9% である。どこにおいてもこのように伝統的産業は大きな曲がり角にある。

### 10 戦後越前武生における打刃物の推移と活性化策

図表 9 によって、全体の動向を検討すると、1970 年の事業所数は 97 であるが、順次減少して 2000 年には 51 となって、47% 減少している。出荷額では 1970 年から 85 年にかけて、3.1 倍と増加している。しかし、85 年から 2000 年にかけて伸び悩んでいる。図表 10 によって、全国に占める鎌と包丁のシェアを検討する。包丁では 1950 年の 8.1% から 2000 年の

図表 9 武生・越前市の打刃物の推移

	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
事業所数	97	82	78	83	66	59	51
出荷額(万円)	28,541	52,28	76,637	90,261	86,438	90,462	76,814

資料：『武生の工業』（武生の統計）

図表 10 武生市の打刃物のお荷額シェアの推移

年	1950	1956	1960	1966	1969	1975	1980	1985	1990	1995	2000
包丁	8.1	2.4	3.8	4.7	4.5	4.7	4.1	4.6	2.6	4.4	3.9
鎌	4.5	2.6	6.4	7.8	2.0	1.3	0.7	1.1	0.8	0.9	0.9

資料：『工業統計表』

越前武生の打刃物の隆盛と衰退

3.9%と半減している。鎌では1950年の4.5%から2000年の0.9%と大幅な減少となっている。

図表11によって鎌の製造業者をみると、1973年には22の業者が存在している。なかには、池田打刃物のように1820（文政年間）年に創業して、180年の歴史を持つ業者もいる。当地がいかに伝統ある鎌の産地であるかを物語っている。しかし、2001年に営業しているのは4業者のみである。現存しているのは池田、岡田（武）、斎藤、相馬の4業者である。岡田（武）製作所は100年の歴史を持っているが、現在3代目でナイフが主力製品となっている。ほとんどの事業主は70、80歳台の高齢者で、事

図表11 越前武生の鎌製作所（1973年）  
越前鎌製作所（鍛工場）の創業年月・製造品目・生産数量（丁）・販売先

番号	製作所名（鍛工場）	創業年月	製造品目	従業員数	年間推定生産数量	販売先（取引先）
				(人)	(千丁)	
1	市川新一打刃物製作所	江戸末期（安政）	刃鎌包丁	2	約30	ほとんど地元卸商へ
2	市川利男打刃物製作所	昭和35年ころ	刃鎌包丁	1	約10	〃
3	池田打刃物鎌製作所	江戸末期（文政）	刃鎌各種	3	約30	〃
4	生田打刃物鎌製作所	昭和4年ころ	刃鎌各種	1	約10	〃
5	岡田打刃物鎌製作所	江戸末期（安政）	刃鎌各種	1	約10	〃
6	岡田武士打刃物鎌製作所	明治40年ころ	刃鎌包丁	4	約30	〃
7	金子鎌製作所	江戸末期	刃鎌各種	2	約20	〃
8	金子義雄鎌製作所	明治25年ころ	刃鎌各種	3	約10	〃
9	桐谷打刃物製作所	明治初年	刃鎌包丁	3	約30	〃
10	佐藤鎌製作所	明治25年ころ	刃鎌各種	2	約20	〃
11	佐々木鎌製作所	昭和30年ころ	刃鎌各種	1	約10	〃
12	斎藤鎌製作所	昭和30年ころ	刃鎌各種	1	約10	〃
13	重川鎌製作所	昭和21年ころ	刃鎌各種	2	約20	〃
14	相馬鎌製作所	昭和25年ころ	刃鎌各種	2	約30	〃
15	田中鎌製作所	大正3年ころ	刃鎌各種	1	約10	〃
16	田中幸雄鎌製作所	大正初期	刃鎌各種	1	約10	〃
17	山本鎌製作所	明治後期	刃鎌各種	2	約20	〃
18	安田鎌製作所	昭和4年ころ	刃鎌各種	2	約30	〃
19	安田銀次郎製作所	昭和25年ころ	刃鎌包丁	1	約10	〃
20	藪鎌製作所	昭和30年ころ	刃鎌各種	1	約10	〃
21	平賀鎌製作所	昭和30年ころ	刃鎌各種	1	約10	〃
22	坂野鎌製作所	昭和30年ころ	刃鎌各種	1	約10	〃

出所：中村忠次郎，1973年9月調査。

資料：大農林会 [3]，p.6。

## 越前武生の打刃物の隆盛と衰退

業の継承も順調ではない。もはや、当地に過去の隆盛をみることはできない。

つぎに、図表 12 によって、戦後の越前武生の打刃物の出荷額を品目ごとに検討しよう。1950 年には最大の打刃物は鎌から包丁に変化している。1913（大正 2）年に産地の品目が鎌と包丁に限定されているので、品目を増やすため他産地から職人を招いて製造試験場が設立された。このため、バリカンや大工道具やハンマー、レンチをつくるようになった。このため、1 時は品目が増加したが、1970 年代に入ると元の鎌と包丁に戻っている。これらの品目で他産地と競合するような競争力を得ることができなかったのである。

このように全国の鎌や包丁の市場規模は縮小しているが、越前武生はその縮小のスピード以上に縮んでいる。このような状況の中でどのような産地の活性化策がとられたのか検討してみよう。

図表 12 越前武生の打刃物の構成（100 万円）

	包丁	バリカン	産業用 利器	手工具	手引 鋸刃	鋏	鋤	馬鋏	押切	鎌	その他 農具
1950	6,021		150		475	850	1,796	1,500	964	4,794	405
1952	4,333	1,520	150	753	500	1,256	4,075			2,490	2,083
1961	5,738	213				4,575	425			4,809	3,661
1966	78.4		5.0			2.6				80.2	9.6
1969	127.2		3.6					12.0			7.1
1975	307.4							139.6			139.6
1980	496							79			
1985	520							163			
1990	443							87			
1995	459							413			
2000	377							54			
2006	523							160			

資料：『工業統計表』

戦後の統制経済の混乱が収まる中で、業者と販売者が協力して産地の活性化を図るため越前打刃物商工協同組合が1951年に結成された。これは製造業者、刃付け、商業者それぞれの組合が合同したものである。それだけ産地の衰退への危機意識が高まっていたのである。しかし、すべての業者の組織率は76%で、40業者が加入していない。商業者は80%加入しているが、工業者の加入率は72%と低くなっている。この、商工協同組合は結成まもなく、1951年に共同作業場を設置した。

打刃物の事業者は零細で機械化が進展していないので共同作業場に最新の機械を備え付けて共同利用しようというものである。また、原材料の共同購入も実施されて、市価よりも10%から20%安く入手できるようになった。また、熱処理の講習会も共同作業場で行われた。さらに、同組合の中に圧延部が設けられ利器材を作ることになった。これは鉄と鋼を接合した利器材はカネサや山陽利器から購入していたが、組合で自給しようというものである。しかし、1962年に圧延機械は武生特殊鋼材に譲渡された。前述したように武生特殊鋼材は1954年に当地に利器材を供給するために、卸問屋主導で設立されたものである。

打刃物の鍛冶にとって地鉄と鋼を鍛接する作業は重要で、全体の作業の三分の一以上を占める。打刃物の用途に応じて地鉄と鋼を選ぶことができる。あらかじめ地鉄と鋼を圧延ローラー等で接合したものを利器材と呼んでいる。利器材を最初に開発・製造したのは、1919年設立された山陽利器である。これは量産が可能で、利器材を利用すれば鍛冶作業は大幅に効率化する。1921年には吹田市にカネサ利器が設立された。その後30年たって武生特殊鋼材が地元で利器材を提供するために作られたのである。しかし、1959年に当社は画期的な利器材を開発している。これはステンレスを母材に鋼を挟んだ利器材で、高価な焼き入炉なしで焼入れができるので、零細な鍛冶業者でも打刃物のステンレス包丁を作れるのである<sup>13)</sup>。当

13) 青山 [2], p.8.

社は積層鋼を開発して、これは海外にも輸出されている。現在当社の売り上げは10億を超えて越前武生の打刃物の市場規模の2倍以上となっている。

販売業者は全国で開かれる見本市や展覧会に打刃物を出展して、知名度を高めようとした。さらに、当時から業者の団結の証として打刃物会館を作ろうと企画されたが、現在までに当時構想されたものは実現していない。戦後徒弟制度は廃止されたが、しばらくは機能していた。越前武生で技術者の養成・継承者の育成は重要な課題となった。そこで、1965年に越前打刃物共同職業訓練所が開設された。これはドイツのマイスター制度のデュアル教育システムと同じである。すなわち、訓練生は平素の業務をしながら、火、金曜日の夜7時から9時まで授業が行われた。これは基礎技能から専門教育を含めた総合的教育であった。修行期間は3年であった。越前武生では産地の活性化のため、訓練所の設置はされていたが、これほど本格的なもののはじめてであった。

1968年共同訓練所を卒業した若者30名が新しい研究会を結成した。その組織は武生フューチャーと呼ばれ毎月1回の例会を重ねた<sup>14)</sup>。このうち11名が1973年武生刃物工業研究会を立ちあげて、産地の活性化のための議論を行った。このグループは1993年にタケフナイフビレジを設立した。これは工業研究会の10名の共同工房である。この施設の特徴は建物の斬新さではなく、住まいと仕事場が分離されていることである。また、鍛冶の設備のほとんどが共有されているため、管理が行き届いていることである。さらに、職人同士の情報交換が絶えず行われ、協調行動できている。また、職人相互のライバル意識はここの創意工夫を生み出すメカニズムを内包している。それぞれには血縁のある者及びない者の弟子がついており、従業員として働いている。技能者の養成システムとして機能している。

また、1974年には福井県刃物工業団地が建設され、市内にいた鍛冶業

---

14) 斉藤 [6], p.442.



者は10名が移転した。市内の作業場は職住混合であったが分離され、工場規模は拡大した。機械化が促進されて、騒音問題は解決した。1977年には他の産地に先駆けて、包丁、鎌、鉞が伝統的工芸品に指定され、10名の伝統工芸士が認定されている。この指定が一番であったことはそれだけ衰退への危機感が強いということである。

## おわりに

越前武生の打刃物産地の隆盛と衰退の原因を以下検討してみよう。まず、産地の隆盛の要因として以下4点を挙げるができる。

### ①地理的要因

政治経済の中心地である京都・大阪に近く、北陸路への入口であり、北前船の寄港地である三国港と河野港を抱えている。原料の移入と製品の移出に適している。

### ②高い製造技術

鍛冶事業者は歴史的に伝統的な方法で良い製品をつくることのみ集中した。量産ができない時代は、刃物を大事に丁寧に使用する文化があり、こうした作り方は時代に適合していた。

### ③販売業者である卸問屋による販路開拓

卸問屋は産地の業者を支援して販路を全国に広げていった。また、株仲間を作り乱売を防止した。

### ④藩の支援

藩は財政難を立て直すために、卸問屋を支援し、仲間株の制限を厳しく運用し、販路拡大に協力した。

越前武生の産地の衰退の要因は以下の6点を挙げるができる。

### ①伝統的な製造方法への固執

技術の変化が大きいときは、かえって伝統的な製造方法へのこだわりは障害になる。これが機械化や洋鋼に対応した技術変化に遅れとなった。

②卸問屋と製造業者の対立

販売業者が大きくなると、当産地の生産品目が少ないため他産地に依存せざるを得なくなり、業者を完全な下請けにしてしまい、売れるときだけ利用するようになった。

③製販一体となった振興策の困難さ

業界が大きく変化するときは、協力した施策が必要であるが、製販が一体となっていないので、実効性のある施策による成果は期待できない。

④製造業者の零細性

製造業者は家族経営で零細であり、機械化に遅れる。また、製品の企画力がなく、産地の活性化への対応は遅い。

しかし、現在の越前武生の振興策には、衰退への危機感が共有されており他産地にはない興味ある試みもみられる。これらの施策の効果と実効性について今回は詳細に検討していない。

以下産地活性化のためのポイントを挙げてみよう。

①製販一体となった後継者育成のための施策を早急に取り組む必要がある。

後継者を育成できても彼らが事業を継続できるように、廃業する既存の事業者の施設を買いとることができるような支援が必要である。

②越前武生の打刃物産業は地域の工業の中で大きなウエイトは占めていない。このため、当産業を単独で支援する効果は薄い。他の産業と一体とした振興策が期待される。

③伝統的産業を振興する時、伝統的なものと現代的なものとのバランス

## 越前武生の打刃物の隆盛と衰退

を考える必要がある。伝統的なものだけでは振興は不可能である。また、現代的なものによる振興は他産地でなされているので、伝統と現代を共生させた振興策を模索すべきだ。

- ④このためには、素材業者である武生特殊鋼材が鍵になる。製販が共同してこの特殊鋼材と共同して素材開発に創意を發揮して、越前武生の固有の打刃物を製造すべきである。

### 参考文献

- [1] 朝岡康一『鉄製農具と鍛冶の研究』法政大学出版局、1986年。
- [2] 青山尚弘「武生における打刃物業の変容」(『地理学報告』vol.73, 1991年)
- [3] 大日本農政会『日本鎌・鋏・犁』1979年。
- [4] 桑田優『伝統産業の成立と発展』思文閣出版、2001年。
- [5] 桑田優『三木金物問屋史』全三木金物卸商協同組合、1984年。
- [6] 斎藤嘉造『槌の響 越前武生の打刃物』1986年。
- [7] 西井俊蔵『越前鎌』新農政新聞社出版部、1942年。
- [8] 農林省四国農林試験場『日本鎌の関する研究』1943年。

## 越前武生の打刃物の隆盛と衰退

### 越前武生の歴史

1332	刀鍛冶千代鶴国安等越前に住む。(越前打刃物鍛冶由来等)
1668	鎌・菜刀が越前国の名産品と記述。
1742	武生の鎌と鉞が名産品と記述。
1746	鎌・包丁・釘の鍛冶仲間があり、取締役がいた。(鍛冶仲間記録) 鎌鍛冶が27戸あった。(鍛冶由書)
1772	武生の鎌と釘の鍛冶屋商人成立。
1777	武生の鎌と釘の鍛冶職にそれぞれ仲間があり。 鞆株が定められる。(鍛冶仲間記録(-))
1790	鍛冶仲間法書できる。
1843	鍛冶仲間より福井産物役所へ砥石役銀5貫206刃上納する。
1850	山内長四郎が伊賀、伊勢を巡視し伊賀型切鎌の製法を工夫。
1859.7	福井藩に物産総会所を置き、武生に制産方をおく。
1859.10	鎌間屋36名物産総会所の免札を願出て許可される。
1866	明治政府は「商法大意」を定めて株仲間の数の制限を廃止、
1874	「府県物産表」編集される。越前鎌の生産額全国1位の記述。
1891	改良利器伝習所の看板を南条郡役所より交付される。
1910	播州鎌の量産化活発となる。
1913	打刃物製造試験場設置。
1919	山陽利器設立。
1921	大阪府カネサ利器設立。
1924	金沢の中村治吉、打刃物用のベルハンマー製作。
1929	越前打刃物同業組合製造試験場新築。ベルトハンマーが初めて使用される。 武生の小学校に金工科設置。
1951	商工協同組合共同作業場発足。
1952	武生金属工業試験場設置。
1953.3	越前打刃物研究会発足。
10	商工協同組合共同作業場に圧延ロール機購入。
12	越前打刃物振興研究会発足。
1954	武生特許鋼材設立。
1957	動力刈取機市販始まる。
1963	武生工場試験場設置。
1965	越前打刃物協同職業訓練所設置。
1968	武生刃物フューチャ設立。
1969	越前D.P鍛造会設立。
1973	武生刃物工業研究会結成。
1974	福井県刃物工業団地起工式。
1978	越前刃物国指定の伝統的工芸品となる。
1980	越前打刃物伝統工芸士8名認定。

(2011年11月30日受理)